

Title	佐々木陽一郎君学位授与報告
Sub Title	
Author	佐々木, 陽一郎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1979
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.72, No.6 (1979. 12) ,p.885(193)- 887(195)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	学位授与報告
Genre	
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19791201-0193

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

学位授与報告

佐々木陽一郎君学位授与報告

報告番号 甲第538号

学位の種類 経済学博士

授与の年月日 昭和53年9月22日

学位論文題名 「飛騨国高山の人口史学的研究」

内容の要旨

「飛騨国高山の人口史学的研究」論文要旨

佐々木陽一郎

本論文は、宗門人別帳を利用した飛騨国高山の18世紀後半から19世紀後半に至るまでの人口史学的研究である。以下のような構成をもつ。序論、第1章「高山宗門人別帳に関する若干の分析」、第2章「プログラム」、第3章「概観」、第4章「出生と死亡」、第5章「移入と移出」、結びの章別編成になっている。序論では問題提起として、従来の江戸時代の都市人口史研究を簡単に紹介するとともに、本研究の人口史研究における位置を提示し、主たる目的は都市に関する人口史学的データの紹介と、それに関する若干の分析であることを示してある。

第1章では、利用した高山宗門人別帳の史料批判及び分析の技術的方法と資料の編成とを示してある。即ち、分析方法は以下の如くである。まず、人別帳の提供する情報を分解して個人経歴データ (life history) を作成する。さらにコーディングを行なった後、コンピュータを利用して必要な人口史学的データを得た。それと同時に、高山の宗門人別帳が極めて優秀な人口史料であることを史料批判を通じて示してある。第2章では、恐らく日本における初めての人口史研究へのコンピュータ導入であるとの判断から、利用したプログラムの若干をフローチャートの形で説明しておいた。データ編成、プログラミング、使用言語等についても若干の反省とともにその内容を紹介してある。

第3章以降が人口史学的研究になるが、まず第3章では、18世紀後半から19世紀後半までの高山の人口趨勢を概観し、江戸時代の都市としては例外的に増加傾向にあることを明らかにするとともに、人口増減が自然減と社会的増減の複合であり、さらにその背後には

自然条件の変化——農業の好・不況という、自然的・経済的要因が強く働いていることを紹介した。また、市域を主として家持層の集中する部分と細民地域に分割して、人口諸指標における両者の対比を行なった。そこでは両者の人口諸指標には大きな差があり、従って都市域の部分的な研究では都市全体の傾向を判断することは困難であろうことを予備的に示すとともに、主として高山の人口増減を支えたのは農村より移入する人口による細民地域であることを明らかにした。このことは、今後の都市人口史研究には重要な問題点を提起していると言える。

第4章では、高山の自然増減要因に関する分析である。まず、出生については粗出生率を決定する要因として、年齢別人口構成・性比・有配偶率・結婚出産力・一般出産力を提示し、それらの分析と農村の比較を行ない、都市が農村に比べて増加要因に乏しく、また、高山の出生を支えたのは農村からの移入人口であることを明らかにした。他方、死亡では年齢別人口構成と年齢別死亡率から生命表を作成して、都市の死亡構造を分析するとともに、死亡人口の出自を対比することによって、農村からの移入人口が高山の死亡率引下げに貢献していることを示した。また、農村との対比を通じて、都市の死亡率は農村のそれより高いこと、及び農村から都市への移入人口は農村に定住する人口より短命であることを明らかにした。最後に、一般出産力と生命表から再生産率を算出し、高山の人口再生産構造を分析した。

第5章では、社会的増減理由を分析した。まず、市外移入で高山は圧倒的に移入超過であり、第3章と統合して結果として高山の人口増加を支えたのは、その大半は農村出身人口によって占められている市外移入人口であることを示した。ついで、市外移入人口の移出入理由が結婚・養子・分家・同居・引越のような、単身・挙家の区別はあるにせよ、主として家族構成員になるか、もしくはその解除であり、従来信じられてきたような年季奉公人のような直接的労働力提供の形式による移出入は極めて少ないことを明らかにした。また、都市と言えども欠落が移出の重要な理由であることも示した。最後に、移出入圏について分析し、移入については殆ど飛騨国内に限られ、他国よりの移入は少数であること、移出では欠落も含めれば他国移出が重要なウエイトをもつことを明らかにした。

論文審査の要旨

論文の概要：

江戸時代の飛騨国高山について、残されている一之町および二之町宗門人別帳を利用し、後半約100年間の人口、その構成と変動について観察を加えたものである。序論、第1章 高山宗門人別帳に関する若干の分析、第2章 プログラム、第3章 概観、第4章 出生と死亡、第5章 移入と移出、結びより成り、付録としてプログラムおよび図表を添えている。本篇400字詰原稿用紙551枚、付録232枚である。第1章および第2章は、主として、利用した史料の吟味、整理の方法を説明し、第3章以下が観察結果に充てられている。

論文の特徴と意義：

江戸時代の人口研究にとって、宗門人別帳は、現在でいえばセンサス原票に匹敵する重要な基礎資料であるが、本論文は、そういった基礎データを整理し、高山に関する基本的な人口統計を作成したところに意義を見出すことができる。従来、経済史のみならずあらゆる日本の史的研究分野において、都市の人口研究は全くといってよい程行われずに済まされてきた。これは、一つには研究者の関心が人口になかったからでもあるが、研究資料の整理や取り扱い方が十分確立していなかったからでもある。農村と比べて、一行政単位当りの人口数があるかに多い都市の場合、資料の整理や統計の作成には莫大な労力を要するため、敢えてこれに挑戦する者は存在しなかったのである。

本論文は、約12年間に亘る筆者の高山宗門人別帳との格闘の結果であるが、わが国で最初の江戸時代都市人口史の研究であると同時に、膨大な資料の整理に当たっては、以下に述べる方法によって電子計算機を利用し、史的研究に一つの技術的な新局面を開こうとした点についても評価しうるものである。

原資料は、高山市郷土館に保存されている一之町(1819~1871年)、二之町(1773~1871年)の毎年の人別帳であるが、これを全点マイクロフィルムに撮影し、記載事項を基礎シートに転記する作業から始まる。ついで、このシートに登場する男女個人個人について、その出生から死亡、または人別帳への出現から消滅に至る間の経歴を1人1枚のカードに書き込む。これには、その者の居住地、家族内の地位、土地の保有に基く富裕度、出身等が含まれている。カード枚数、即ち取り

扱う人口数は40,275に達した。これをコード化してファイルし、計算機にかけて諸統計を作成する。この場合、原資料の記載の不備から色々な厄介な問題が生じるが、筆者はそれらの問題一つ一つを十分検討し、処理している。たとえば原資料に出てくる年齢記載の誤りは、すべて初出の年齢を正しいとするとか、記載洩れの場合は、一定の原則を設けて修正を施したりしなければならぬのであるが、こういった補正は全体的に見てそれほど多いものではなく、(出生、死亡、移出入の全体で平均1.86%)結果的には統計の精度に対する影響は僅少にすぎない。

さて、当該期間を通じて、高山の人口は増加し、一之町では52年間に37%、二之町では99年間に27%の増加率を示している。尤も人口の推移は、典型的な前近代型で飢饉、流行病による大きな落ち込みを何度か経験し、とくに1837・38年には、2年間で両町とも10%以上の減少を示している。論文によれば、人口の変動を、自然増減と社会増減に分けた場合、男子ではごく僅かな自然増があるものの、女子では自然減であり、結局、人口増加の大部分は社会増によっていることがまず観察される。

著者はこのことから、江戸時代都市の人口再生産能力がゼロもしくは、マイナスであったこと、増加は専ら流入人口の大きさによることを検証しているのである。しかし、移入人口を理由別にみると、農村地区からの養子、縁付という関係を通じての流入が多く、引越がこれにつき、奉公というような雇用関係での流入は意外に少なくなっている。このため、高山の年齢別人口構成は、相対的に20歳~50歳がふくらんだ都市型の構造となっている。

ところで、人口の再生産能力に関連して興味深い観察結果として、それぞれの出身地別によって結婚や出生を追ってみると、女子の場合、全体として農村に比較して年齢別出生率は低いのであるが、高山の中では、農村で生れ高山へ入って来た者の配偶率は、高山で出生した女子のそれよりも高く、一般出生力には相当の差を生じている。結局移入人口は、移入自体によってこの都市の人口を増加させるのと同時に、高い結婚率によって一般出生力を高め、二重の意味で人口増大に寄与している。

人口諸指標に関して、富裕度は意外なほど有意な差となっており、居住地域を一之町・二之町ともその中で町の成立由来に基いて古町と新町に分けた場合、古町では人口それ自身、長期的には

殆んど変化を見せていないのに対し、新町で細民層の増大がみられ、人口増大は都市域の拡大に伴うものであったことが判る。そして古町には、相対的に富裕な者が住み、一人当りの生活空間には変化がなかったと云えるだろう。

最後に、生命表について、次のような観察がされている。測定は、東京大学大型計算機センターのプログラムライブラリのものを利用しているが、人別帳を用いた場合、年齢表示がすべて数え歳であること、同1歳の死亡が確認できないことから、プログラムに若干の修正を加え、また、寺院過去帳により数え歳1歳の死亡率を測定した、須田圭三氏による研究を適応する等して現在のそれとの比較を可能としている。全期間を通じて、14,000人余りの死亡年数が判るのであるが、数え歳1歳すなわち出生時の平均余命は、男子30.99、女子29.46である。時期別にみると、とくに顕著な差はないが、大量の死亡者を出した1837年の場合、死亡者が若年層に多かったため、この年の死亡のみをとると、平均余命は男子9.2歳、女子10.7歳と極端に低くなっている。また、男女の差は、最後の時期にそれまでの男子が女子より長命であった関係が逆転したことが注目される。

以上の如く、本研究の観察は詳細を極め、到底ここに要約し難いほどであるが、同時に欠陥もないわけではない。従来、日本でこそ同種の研究はなかったとはいえ、近代以前の都市人口、或いは近代の都市人口の研究は、欧米においていくつか出版され、結果の一般化も行われている。そういった先行研究との関連を論ずれば、この高山における観察結果の持つ一般性と特殊性について判断を下す糸口は見出しえたであろう。また、文章の表現法に一考を要する箇所がいくつかあり、全体としての主張をあいまいなものにしている。図表の提示にしても、やや網羅的にすぎる。これをより簡潔にし、少なくとも本文においては、文章の叙述に必要な最少限なものにとどめる等一工夫あれば、論文としての体裁ははるかに整ったものとなったであろう。

総合所見：

ともかく、4万人以上の庶民の行動を資料から観察し、計算機による整理法を開発した点、その独創性を十分認めることができる。観察すべき事項や分析の多くは、なお今後に残されているが、筆者が体得したプログラミングの能力によって、高山のデータはこれからも豊富な情報源として活用されることは間違いない。

よって、本論文は経済学博士の学位を付与するに価するものと考える。

論文審査担当者	主査	速水	融
同	副査	島崎	隆夫
同	"	鳥居	泰彦